

○議長（武石善治） 次に、3番、齊藤鉄子君の発言を許します。3番、齊藤君。

（3番 齊藤鉄子議員 一般質問席登壇）

○3番（齊藤鉄子） それでは、農業政策と後継者対策について質問させていただきます。北林議員の1つ目の一般質問の中での村長のご答弁の中で、私の質問にも、答弁があるような気もいたしますが、まず、質問させていただきます。

上小阿仁村の基幹産業は農林業であると、村長はおっしゃられておりますが、村は高齢化率47.4%の全県一の村となっております。そして、高齢化や後継者不足、耕作放棄地の増加などの人と農地の問題のために、5年後、10年後の展望が描けない地域が増えておます。

今までは農地の出し手となった人も、地域農業に参画できる、いわゆる、ぐるみ型集落営農の推進で地域農業、集落の営農を守ってきました。しかし、地域の実態は千差万別であります。経営体への農地集積や法人化などが順調に進む地域がある一方で、核となる担い手や集落営農などの見通しが立たず展望を描けないところもあります。

集落、地域における話し合いによって、（1）今後の中心となる経営体、個人、法人、集落営農はどこか。（2）中心となる経営体へどうやって農地を集めるか。（3）中心となる経営体とそれ以外の農業者、兼業農家、自主的農家を含めた地域農業のあり方。生産品目や経営の合理化、6次産業化。を行政として誘導していかなければならないのではないのでしょうか。

かつて経済同友会は、100haの経営を1万戸作るという提言を行い、また、前民主党政権は20～30haの経営体を5年間で8割にするという政策を打ち出しましたが、今は、それを言う人はおりません。なぜならば、どうしたら農地を、これら経営体を集めるのか、また、これらの農家が誕生したとしても、地域社会はどんな姿になっているのか、兼業農家は農業から離脱して、どこに住むのか、どんな仕事に就くのか、そこには地域の活動はあるのか、地域の安定は確保できるのか、等々の疑問に答えきれないからです。

求められるのは、地域で混住しながら、兼業も行いながら、多様な農業者が共存する形であり、そのことが地域を守り、村を守るのではないのでしょうか。

人口減少と高齢化により、生活機能の低下、常駐医師の課題、維持が困難な集落の増加など、様々な問題が予想されます。耕作放棄地の増加や森林の荒廃も進みます。そういった山積する課題の中で村政の質を向上させなければ、村は発展もなく、過疎の村として埋没してしまいそうです。今こそ、住民と行政が一体となって村づくりを行っていく仕組みをつくらなければならないと思いますが、いかがでしょうか。

また、J Aからの情報で調べてみますと、水田総面積 479.1ha のうち 5ha 以上の農家数は 15 戸で、245.5ha を耕作しております。農家率で 6.1%の農家が、水田総面積の 51.2%を耕作しています。農家戸数 247 戸の平均年齢は 69.4 歳。世代別では、40 代が 12 人、50 代が 41 人、60 代が 73 人、70 代が 83 人、80 代が 41 人、90 代が 3 人。60 代までは 126 名で、49.8%を耕作しております。20 代、30 代の後継者は少ないながらもおります。今後のことを考えると、若者が意欲をもって就農する環境づくりが必要と思いますが、考えをお伺いいたします。よろしく願いいたします。

○議長（武石善治） はい、村長。

（中田吉穂村長 登壇）

○村長（中田吉穂） 農業分野に、なかなか知恵がまわらないというふうな村長に対して農業分野のお答えを求めるということで、どうしてこんなことを聞くのかなど、第一にこう私は思います。というのは、地域は光るものがなければいけない。私は、その数字云々というよりも地域がどうやって上小阿仁村として生きていくのか、どういう香りをはなつことができるのかと、こういう、私なりの考え方なのですけれども、実際に農家をやる人方がどれだけの覚悟をもって、この地域で農業をやろうとしているのか、数字を見れば大変厳しい。議員のおっしゃるとおりでございます。

それに対して、行政が、ああでもない、こうでもない、そのとおりだと、こういったところで、果たして農家の人方がそのとおりに動いてやっていけるだろうか。私は田んぼがあつて担い手がいない、そうなったら応援を頼むしかない。考え方は、そういうこともできるわけです。あれもできない、これもできないという、そういう考え方だけでは、私は難しいかなと、ただ、農政省とも、前に東北農政局とも話し合いの場がございました。県の方に行って、その時に 20 町歩、30 町歩というお話もいただきました。しかし、上小阿仁村の場合、そういう話をされてもできないと、やる人がいないわけです。そしてまた、そういう地域がないわけです。つながっている地域が、あっちにとんで、こっちにとんでと、ですから、机上の上で政策を作るのも結構ですけれども、では、上小阿仁村にきて実状はこうですよと、こういう地域はどうすればいいんですかと。そこまでも農政局の方にお話をしてきました。

実際に、では、山間地域に足を運んで、こういう田んぼでは、これだけの収入しか上がらないし、これだけ収益が無いものに対して、果たして国の政策が、それでご飯食べて、この地域が成り立っていくのかと、答えはありませんでした。つまり、国の政策云々というよりも、私は、自分達が、この地域でどのような暮らしをして、どのように子ども達に夢を持たせて暮らしていけるか、そういう考え方を、やっぱり進めていかなければならないのではないのかなと、

そういうものに対して、では村はどういう支援ができるのか。農家の人方と、また議員の人方と腹を割って、やはり話し合いをしながらやっていくしかないだろうと、でなければ、お祭りもできないような、そういう地域になってしまう。

冬になれば雪下ろしも、簡単なようだけれども、雪下ろしするにしても、皆が高齢者になっていくわけです。去年までやってあげたお年寄りが、今度はやってもら側、一年というだけで、そういう立場が変わっていくと、それだけ地域が、高齢化が進行しているということも、我々は考えていかなければいけないだろうと、思っております。

多分、これからどういうふうに農業の組織を変えていけばいいのか、法人化へ移行すればいいのか、もう決まっているのだけれども法人化してもらいたいです。集落営農というのは、なかなかその集落のいろんな思惑と言いますか、団体の思惑があって集落営農そのものが、法人化になっていないのが現実ではないかと思っております。そこを農家の人方がどういうふうに考えて、上仏社の地域はひとつの法人化と、法人組織になっているからいいけれども、他の各集落にも営農組織があるわけだけれども、その組織というのは、5年間のうちに法人化するというふうな形で取りかかったはずなのですけれども、今になれば全然それに対する動きも見えないと、はたしてこれでいいのかなど、こう思わざるをえない動きです。

この地域に農業をやりながら、沢山の人が住んでいたはずなんです。昔は、6,000人、7,000人という、そういう村民が、この地域で暮らしを立ててきた。それは林業も一躍を担ってきたと思うし、農業も一躍を担ってきた。そこには商業という商売も成り立ってきたわけだけれども、ひとつが崩れていった、こういった林業関係が崩れて行ったおかげで、この地域がこういうふうにだんだんと活力が失ってきたということは事実だと、私も思っております。

この地域には自然も沢山ありますし、これが答えになるわからないのですけれども、国の制度も活用しながら、そしてまた、地域のこれからの若い人方にも希望を与えるような、そういう農業を、やはり農家個人も目指してもらいたいなと思います。

ガラス温室とか、冬場の収益を上げるような、そういうこともどんどん目指してもらえれば、村でも、皆さんと協力して、できるものであれば補助制度もどんどん確立していきたいと思うし、やはり成功例を作らなければ、なかなか次の人が育ってこないというのが現実だと思います。

今年は、野外試作センターのガラス温室、こちらの方に力を入れてイチゴ栽培になるのか、何になるのかわかりませんが、とにかく力を入れて、年中収穫できるようなそういう体制づくりをつくっていききたいと思っております。

そういったものができれば、米づくりと、またもう一つのそういった園芸作物を生かしながら、地域の農業を守っていければなと思っておりますので、答えになるかわかりませんが、地域の新しい担い手を、農家自身も一生懸命つくっていただきたいと思います。

○議長（武石善治） 3番、齊藤君。

○3番（齊藤鉄子） ご答弁ありがとうございます。

農家自身がもっと積極的にならなければだめだと、意欲を持って進むことも必要だというご答弁であったと思います。それは、もちろんそうだと思います。ですが、なんと申しますか、村として、こういう方向なんだという具体的な、そういう強い方針といいますか、そういうのが今一つ見えてこないような気がいたします。

農家というのは、もちろん、いろんな中山間の直接支払の補助金とか、農地保全の事業とかいろいろあります。それを活用しながら皆で農地を守り、集落ぐるみ、地域ぐるみで農業を守っております。ですが、この村自体として、そういった具体的な方向付けと言いますか、そういう強い方向付けがないように思われてなりません。5年前も、10年前の就農している人たちが、今現在、そのまんま増えないで農業をやっているという現状です。青年後継者もおります。ですが、農家自身は本当に不安に思っているわけです。

村として、本当に強い方向付けと言いますか、そういうのがほしいと思っておりますが、村長、いかがですか。

○議長（武石善治） はい、村長。

（中田吉穂村長 登壇）

○村長（中田吉穂） お答えします。

農業政策というのは、国の農業政策そのものを見ても、猫の目農政と言われるぐらい、ころころ変わってきております。議員のおっしゃるとおり上小阿仁村の農業は、こういう方向へいくんだと、例えば、米作りを目指す、それも品質を目指すのか、ネーミングで売っていくのか、それとも量で勝負していくのか。こういういろんな方向付けが必要かなと、こう思っております。

私は、当選して村長になってすぐに阿仁の棚田を見に行きました。そこに行くとすごく感じたことは、東京都の何々の米だという看板が、田んぼの淵に立っているわけです。こういうのを見まして、清流米とか、いろんなネーミングがあるわけですが、ただ、JAに出荷するだけではなくて、そういうネーミングを生かした、少量であっても高く売れる、そういうお米の作り方もいいのかなと、自分はそう思いましたし、現実には福井県羽咋市の方で、本にもなっていますが、神子米というローマ法王に食べていただいた米がネットで3倍の価格で売られていると、テレビにもはいつておりました。つまり、そういう

ふうな形で地域の米というのをどうやっていくかと。これは農家の人方が、自分方は無農薬でやっていくのか、低農薬でやっていくのか、いろんな米作りの根本的な問題も含んでいると思われまます。

すべての人が同じ方向を向いて米作りをしているとも思われまません。ですから、農家自身の集まりの中で自分方が、上小阿仁の米をこういう方向でやっていきたいと、それすらできていなければ、なかなかまとめ役として難しいのかな。やりたいことは、例えば、八木沢あたりでも、私は棚田を復活させたいと思っていたわけですが、補助制度を使うとなれば、誰がやるのか、どういう受け皿があるのか、皆さんも多分心配されていると思います。そういった面で、私はできるものからやっていければな。そして、まず誰かが何かをやって道筋をつけていく、やって見せるということが、今一番、この村に必要なのではないのかな。全体を巻き込んでいくとなれば、その責任というのは大変重いわけですから、そうした形でいろんな米作りにも、販売にも、皆さんで挑戦してもらいたいと、こう思っております。

そのために、商標登録とか、いろんなところに参加するための、今年は予算化もしておりますので、そういったものを活用しながら頑張ってもらえればと思っておりますので、よろしく願いいたします。

○議長（武石善治） はい、3番、齊藤君。

○3番（齊藤鉄子） ありがとうございます。

農家自身も、それこそ意欲をもって頑張っております。もちろん、それは当たり前のことだと思っておりますが、いかんせん、なかなか今の農政ではそれが日の目を見ないような状況にあると思っております。ましてこの上小阿仁村は中山間地帯であります。もちろん、それについてもいろんな補助金もありますが、それにしてもなかなか容易でないところがあります。

国の人・農地プランというのがあります。農林水産省でするプランですが、そのプランを早く作らないと集積事業とか、青年就農交付金とかにも補助が出ないような現状だと思っております。村として、早くそれを進めていただきたいと思っております。そうすれば、もっといろんな補助があるということで、またいろんな違った場面が出てくるのではないかと思います。ひとつの農家だけが大きくなっても、農業というのは多面的な機能があるわけで、きれいな農地、きれいな土地を維持していけなくなります。残った人達も就けるような、そういった村として強いところが、私は欲しいのですけれども、その耕作しやすい環境づくり、そういうのも必要だと思っております。圃場整備とか、用排水路の整備とか、そういう面では村でも水利組合の方とかに働きかけをしているそうですが、そうではなくて村の方でも積極的に、そういった用排水路を見に歩いて、村の方からの働きかけも必要ではないかなと思っております。

そういったところが、この小さい村、きめ細かなその村としての優しさが、村民に対して出るのはないかなと思います。よろしくお願ひいたします。

○議長（武石善治） はい、村長。

（中田吉穂村長 登壇）

○村長（中田吉穂） 人・農地プランは今現在、作成中でございます。どうしても農地の問題を解決していかなければ、これから5年後、10年後、つくる人がいなくなるということで、このプランがなければやっていけないのだということは、重々、村としても承知しております。また、そうした中で、早めに話し合いの場を設けて、やっていきたいと今進んでいる状況でございます。

J Aや土地改良区、議員も入っている農業委員会、そういった関係の方々との協議会等で、ご意見を伺いながらやっていかなければいけないと。農業再生協議会の中でも後継者問題、これから飛び地になっていく耕作放棄地、これをどうやって守っていくのか、そして、集落だけでそれができるのか、集落営農だけでできるのか、やはり人と人との貸し借りの関係もでございます。人の好き嫌いもあると思いますので、同じ地域で同じ人に農地を貸して、受けてが繋がれば一番いいわけですがけれども、そうもいかない場面も多々発生してくるのではないのかなと、いろいろな形を想定しながら進めてまいりたいと思っております。

この地域で暮らしていくためには、農業や林業、様々な職業の人方を巻き込みながら、地域を盛り上げていかなければいけないということで、なるほど、役場の職員が、その水路の状況までもどうなっているか確認に、歩けばこれに越したことがないのですけれども、なかなかそこまで手が回っていない。

そしてまた、農業に対しても実際に家に帰って、親に農業の手本を受けているのかなと、そういう職員が対応したり、そういう難しい面もでございます。

外部から見て、いろいろ至らない点もあろうかと思っておりますけれども、そういった面を考慮しながら、これからも農業の皆さんの、この農地プランに係わりながら、指導を受けながら頑張っていかなければいけないと思っております。

農業にしても、林業にしても、建設業や、もろもろのこの村の中で生活しているそういう方々にとって大変な時代ではございますけれども、できるだけ力を合わせながら頑張っていければと思っております。

農業に対して、齊藤議員は大変若いときから、そしてまた子どもにもそういう道を歩ませているといった中で、いろんな思いがあると思いますし、また、そういう地域にとっていろんな景観から、そういう地域を守るために頑張っておられることも重々承知しておりますので、そういった面で、ご支援ご指導いただければありがたいと思います。

村として何ができるのかと、こう農業に対して問われれば、大変今難しいわ

けですけれども、一生懸命頑張っていれば、何かいいことがあるのではないのかなど、そう思って私は頑張っておりますので、どうか、その点ご理解をお願いしたいと思います。

○議長（武石善治） はい、3番。3回終わりましたので。

○3番（齊藤鉄子） ありがとうございます。人・農地プランは、25年で終了でございますので、何卒、その点をご留意くださいますして、なるべく早く国の補助制度なりに、早く進めてくださるよう、よろしくお願ひしたいと思います。

3回質問が終了しましたので、私の一般質問は、これで終らせていただきます。何卒、よろしくお願ひいたします。